



〔報道〕春陽会第九回展(大阪展)
・『大阪毎日新聞』 昭和六年五月十日

春陽会展 盛況の第一日

春陽会第九回展(大阪展)

昭和六年五月九日〜十八日 於・大阪府立貿易館

大阪毎日新聞主催

けふ九日から大阪府立貿易館で開かれた、本社主催 第九回春陽展は本年は本年は特に力強い大作が多いので朝来多数の観覧者が押しよせ盛況を呈したが、殊に会場の設備、作品の配列が一段と工夫されたので観る人達は非常に満足である。会期は十八日まで。

なほ、春陽会会員多数来阪を機に十一日夕、本社で美術講演会を開くほか、十二日午後七時から大阪白木屋八階で「春陽会員を中心とする座談会」を開くことになり、左記の諸氏が出席する。参加希望者は本社事業課まで申込まれたい。

出席の春陽会会員 長谷川昇、林 倭衛、今関啓司、石井鶴三、木村莊八、鬼頭甕二郎、小杉未醒、小山敬三、中川一政、田中善之助、山崎省三。

春陽会会員による講演会

十一日午後七時から 本社講堂において

・『大阪毎日新聞』 昭和六年五月十二日

本社主催で去る九日から大阪府立貿易館で開催中の第九回春陽会展覧会を機として来阪した春陽会会員を迎へての春陽会講演会は、十一日午後七時から本社講堂で開かれた。和気本社講演課長の挨拶について、山崎省三氏、石井鶴三氏、木村莊八氏が講演した。講演の題目・内容は以下の通り、

山崎省三氏「滞欧所感」——近ごろ交通、通信機関の発達で内外人お互ひの旅行は次第に多くなつて来た。そして外国へ旅行し外国で生活することも、今日では日本の国内を旅行し日本の中で生活するのとあまり異なつた感じを抱かせないやうにさへなつたが、さうしたうちにも外国へ旅行し外国で生活してゐる間には、少しも感じなかつたやうな「日本人の心」をふとした機会に見出すものである、とさきごろの欧州滞在の体験を語られた。

石井鶴三氏「立体美」——生活には平面の生活と立体の生活とがある。立体の生活は平面の生活に比べて深みがあり動きがある。それと同じやうに、美といふものにも平面の美と立体の美とがある。絵画は平面の紙なり布なり板なりに描かれ、さういふ意味において平面のものといはれるかも知れないが、絵画に立体は不必要どころか却つて非常に必要なものである。なぜなら立体に生きる時、美は平面におけるよりも光彩を増すからである。

る。同じ月の姿でも、以前は盆のやうに円まるいと思つたが、段々と立体を研究してゆくうちに円いと思ふやうになつた。だからたとへて絵画を描くにしても彫刻をやり、自然のなかから立体的な美といふものを撰取することが出来なければ、本当によいものは出来ない、と約五十分間にわたり講演された。



講演会壇上の石井鶴三画伯

木村莊八氏「明治初年の洋画教習について」——先に本紙夕刊に連載した「ラグーザお玉」の挿絵を描くため材料を蒐集してゐる間に、深く興味を覚えた明治初年のわが国における洋画教習を、そのころ翻刻された『小學畫學書』を中心に語られ、当時における製図的図画教育から近來の自由

1931 10 May/12 May

昭和6年（1931年）5月10日

春陽会第9回展（大阪展 報道 大阪毎日新聞）

画教育にまで説きおよばされた

当夜は聴衆約三百名、午後九時五十分盛況裏に閉会した。